



# キクわい化病の蔓延防止マニュアルの策定

— 目指せ発病ゼロ! —

## 開発の背景・ニーズ

キクわい化ウイルス（CSVd）によるキクわい化病は、葉が小さくなり草丈も短くわい化し、著しく商品価値を損なうキクの重要な病気です。日本では1977年に発病が確認されて以来、全国のキク産地で問題となっています。管理作業や収穫作業で容易に広がるため、蔓延を防止する対策技術の確立が求められています。

## 成果の内容

キクわい化病は、主に罹病キクの汁液で伝染します。土壌中ではウイルスを含んだ汁液は1週間程度で分解しますが、植物残渣内のウイルスは分解されず、根がこれと接触しただけでも感染します。このため、①発病株は見つけ次第抜き取ることで周辺株への感染を防止できる。②収穫後、土壌に鋤き込まれた罹病キクの残渣が伝染源となるため、土壌消毒が有効である。③芽かきなどの管理作業や鎌などでの収穫作業でも容易に伝染するため、器具等は次亜塩素酸ナトリウム等で消毒を行うと防止できる。こうした成果を取りまとめ、蔓延防止マニュアルを策定しました。

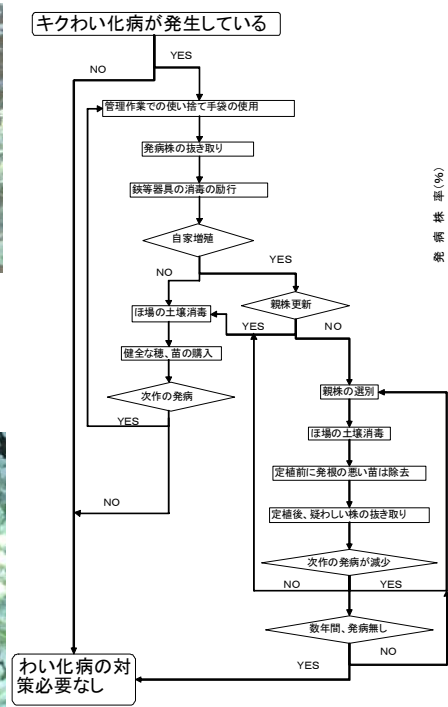
キクわい化病蔓延防止フローチャート



葉の色も薄く、わい化している症状のひどい株を中心に坪状に広がっている



蕾の時期の発病キク

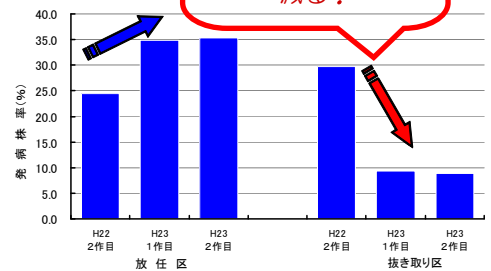


## 愛知県農業への貢献

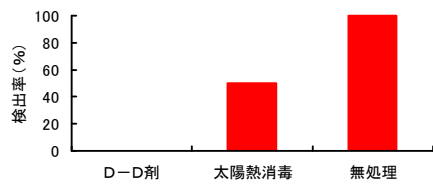
キクわい化病の蔓延防止マニュアルが普及し、産地で対策を講じることで、全国一のキク生産県である本県から今後も高品質なキクが出荷され、愛知産のブランド維持に貢献できます。

【「新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業」で実施した成果です。】

発病株の抜き取りを行うと、翌年の発病がこんなに減る!



抜き取りの効果  
注) 共同研究機関のデータ



土壌消毒の効果  
注) 処理3週間後